

〔展望〕

## 中国における学校教育の現状と 児童生徒のメンタルヘルスに関する研究動向と課題

筑波大学大学院人間総合科学研究科：王 巖崧  
筑波大学人間系：庄司 一子

Issues of School Education and Children's Mental Health Research in China: A review

Yansong Wang and Ichiko Shoji

本稿では、まず、中国における学校教育の現状及び中国の学校教育の社会文化的背景について検討した。次に、中国での教育臨床学に関する学術雑誌である『心理学報 (Acta Psychologica Sinica)』、『心理科学進展 (Advances in Psychological Science)』、『心理発展与教育 (Psychological Development and Education)』、『中国臨床心理学雑誌 (Chinese Journal of Clinical Psychology)』に掲載された児童生徒のメンタルヘルスに関する研究論文のうち、「学校ストレス」、「学校適応感」、「精神疾患」の3つのトピックに関する論文を中心に概観した。以上を踏まえ、中国における児童生徒のメンタルヘルスに関する研究の重要性と今後の課題について論じた。

キーワード：中国の学校教育と社会文化的背景、中国の学校教育の現状、学校ストレス、学校適応感、精神疾患

### はじめに

日本の教育現場では、不登校、いじめ、非行など児童生徒の適応上の問題は依然として大きな課題である（文部科学省，2014）。したがって、近年、多くの児童生徒のメンタルヘルスに関する研究が行われてきた（本間，2000；古市，1991；森田，1991ほか）。一方、中国では、不登校、いじめなどはまだ問題として取り上げられたことはなく、児童生徒のメンタルヘルスに関

する研究も少ない。日本の学校現場で社会問題になっているいじめ、非行、不登校などの問題は、中国では社会問題となっていない。実際に中国ではいじめ、非行、不登校などの問題はどうかであろうか。

いじめについては、張（2002）は、中国の都市部と地方の児童を対象に、学校でのいじめ問題に関する調査を行った。その結果、約5分の1の児童は、いじめ問題に巻き込まれていたとされている。特に言語的ないじめが最も多かったという。

非行については、非行は、中国では「青少年犯罪<sup>1)</sup>」と呼ばれている。『中国法律年鑑』によると、2001年の青少年犯罪人数は約25万人で、刑事犯罪の33%を占め、そのうち未成年犯罪者<sup>2)</sup>は20%である。また、2010年の青少年犯罪人数は約28万人で、刑事犯罪の28%を占め、そのうち未成年犯罪者は24%である。つまり、青少年犯罪の人数は上昇する傾向がある。

中国においては、現在、「不登校」という用語はなく、子どもたちが心理的な原因で学校に行けないことが問題として取り上げられること

<sup>1)</sup> 中国では、青少年犯罪はまだ厳密な法律概念ではなく、広義上、青少年犯罪は14歳から26歳に満たない者で反社会行動などの不良行為である（康，2000）。

<sup>2)</sup> 中国では、刑法に定義されている未成年犯罪者は、犯罪を行った14歳から18歳に満たない者である（中華人民共和国刑法，2015）。

も少ない(翟, 2006)。不登校問題について、翟(2006)によれば学校を長期欠席する生徒はいないが、登校回避感情を抱く生徒は54%に達しているという。王・庄司(2015)の中国都市部と地方の公立中学校の生徒を対象にした研究では、不登校生徒はいないが、登校回避感情を持っている生徒は都市部33%、地方63%であることが明らかにされている。しかし、中国にも、「不登校」と似たような用語がある。例えば、義務教育の段階で様々な理由で退学する小中学生は「流失生」と呼ばれる(新華字典・中国語)。また、「厭学」(勉強が嫌い・怠学)、「逃学」(学校をさぼる)、「輟学」(途中で退学する)、「失学」(経済や家庭など理由で学齢児童が学校に行けない状態)という用語がある。「厭学」と「逃学」の原因は学業の理由が多く、心理的な理由ではない。「流失生」、「輟学」、「失学」の原因は経済的な理由が多く、日本で定義される「不登校」とは異なる。このように、中国において、登校回避感情を持っている児童生徒はかなり存在している。なぜ中国の児童生徒はこのような現状になっているのかが疑問である。

そこで本稿では、児童生徒のメンタルヘル스에影響を及ぼす社会的背景と最近3年の中国のメンタルヘルスに関する研究の課題を検討する。その上で、中国におけるメンタルヘルスに関する研究の重要性という点から今後の課題について検討する。

## 中国の学校教育の社会文化的背景

### (1) 社会文化的背景

勉強、進学など側面で、中国の子どもたちは、学歴や成績、学校のランキングなど、より功利的であり、高い達成意欲を持っていることが明らかになっている(陳・長崎・庄司・茂呂, 2013)。このような状況になってしまった原因を考える際に、社会の文化的背景は不可欠である。

まず、中国の歴史的な官僚選抜制度-科挙制度である。中国で598年~1905年、即ち隋から清の時代まで、約1300年も行われた官僚登用試験である科挙制度は現在の中国の教育に強い影響

を与えている。勉強を通して自らの運命を変えようという人々の期待に根付いているという指摘がある(別, 2005; Li, 2002)。さらに、1979年から2015年までの一人っ子政策の実施によって、1人しかいない子どもに対する家庭の期待が高まっている。家族のすべての期待を子どもにかけ、子どもがよりよい大学へ進学できるよう何でもやるという状況になっている。つまり、現在、学校は非常に重要な存在であり、親を始め、子どもたちは将来のために、高学歴になるために、強いストレスを耐えながら登校している。

次に、報恩意識(恩返し意識)である。中国では、「百善孝為先」(百善のうち親孝行を第一とすべきである)という考え方が、今日でも依然として中国人に大きな影響を与えている。さらに、このような儒教文化の影響で、中国の子どもたちは、重要な他者に感謝する表現を、努力を通してよりよい成績を取ることであらわす(代・張・李・喻・文, 2010)。また、報恩意識は学業成績に正の影響を与えているとされている(叶・楊・胡, 2013)。

最後に、現在の中国の急速な経済成長である。1978年に「改革開放」が実施されて以来、中国は市場経済へ移行した。特に、1992年以降、再び改革開放が進められ、経済成長は一気に加速した。このような急速な経済成長に伴い、競争が激しくなってきた。したがって、特に都市部の親は子どもによりよい学校に通わせ、よりよい教育環境を作ってあげる風潮が現れてきた。また、親は多くの家庭支出を教育に投資している。2013年全国的に、家庭支出の中で、教育や文化などの平均支出率は10.6%である(中国統計年鑑, 2014)。このようなことから、親は子どもに対する過剰な期待を持っている。さらに、子どもたちは過剰な期待に耐えながら、学校に通っている。

### (2) 学校教育の変化

まず、1978年以降現在まで、中国では「科教興国」(科学技術と教育によって国の振興をはかる)戦略や「国家中長期教育改革・発展計画要綱(2010-2020)」など政策が公表され、教育が益々重視されてきた。このような状況の中

で、中国の教育は激変してきている。現在の学校の進学率について。2013年の小学校入学率は99.7%、中学校進学率は98.3%、高校進学率は91.2%、大学進学率は87.6%である。それに対して、1990年の小学校入学率は97.8%、中学校進学率は74.6%、高校進学率は40.6%、大学進学率<sup>3)</sup>は27.3%である。1990年に比べると、現在の高校進学率はかなり上昇した。また、高等教育の規模はかなり拡大されてきた。1978年の大学（専門学校も含め）の募集人数は約40万人であるが、2013年の募集人数は約700万人である。35年間で、大学の募集人数は17倍になっている（中国教育統計年鑑、2013）。

次に、「応試教育（試験成績を重視、従来の暗記中心・詰め込み型教育）」から「素質教育」へ。1999年6月から、学生の創造力と実践能力を重視する素質教育を中心に学校教育を行っている。しかし、学業成績が重視されているので、この戦略的な政策を実施した16年後の現在、子どもたちはまた強いストレスに耐えながら苦戦している。中国の子どもの心や身体の疲れ、及び親からの圧力が大きいことが指摘されている。ベネッセ教育開発センター（2008）の「学習基本調査・国際6都市調査報告書」によると、「学校外での平日の学習時間」を「3時間以上」と回答した小学生の比率は、ソウル（44.3%）、北京（31.4%）、東京（23.5%）、ワシントンDC（5.8%）などである。また、「心や身体の疲れ」を調査したところ、北京の小学生は「目が疲れやすい」（北京77.5%、東京60.5%）、「だるい」（北京67.3%、50.2%）ことが示唆された。この結果は北京の小学生の学習時間の長さとの関連があると考えられる。さらに、「親とのかかわり」を調査したところ、「親は私にいい大学に行くことを期待している」と答えた北京の小学生が88.1%である。北京において、心や身体の疲れ及び親から過剰な期待を感じている小学生が多く存在していることが明らかになった。

また、木山（2005）によると、中国の子ども

のストレスは増えているという。ストレスの原因は、第一に親の過大な期待によるプレッシャー、第二に進学や就職に対する不安、第三に単調で長い学校生活、第四に教師－児童生徒関係に対する不満、の4つが原因としてあげられている（阿部、2005、pp.89-91）。これは経済発展の中で親の教育熱が高まり、子ども（特に一人っ子）に対する期待が高まり、学校は入学試験に応じた教育を行っており、生徒たちは学校で長時間勉強し、単調で長い学校生活を送っているためと考えられる。また、「高校生の生活と意識に関する調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－」（国立青少年教育振興機構、2015）によると、「余暇生活への満足」は「とても満足」と回答した高校生の比率は、日本（35.3%）、米国（37.3%）、中国（27.4%）、韓国（30.6%）であり、「学校生活への満足」は「とても満足」と回答した高校生の比率は、日本（24.2%）、米国（23.1%）、中国（16.8%）、韓国（18.4%）である。この調査から余暇や学校生活について「とても満足」と回答した中国の高校生の比率は4ヶ国の中で一番低いことが示された。

以上より、現在の中国の教育現場において学業成績が最も重視されている。受験の激化により中国の中学生のメンタルヘルスは今後ますます問題になると考えられる。それにより生じた学校ストレス、学校適応上の問題、心身の健康に関する問題が存在している。しかし、中国において、児童生徒のメンタルヘルスに関する研究はあまり重視されていない。中国の児童生徒のメンタルヘルスに関する研究は近年行われつつあると言えよう。

児童生徒のメンタルヘルスに関する研究の動向

次に、中国での教育臨床学に関する学術雑誌である『心理学報 (Acta Psychologica Sinica)』、『心理科学進展 (Advances in Psychological Science)』、『心理發展与教育 (Psychological Development and Education)』、『中国臨床心理学雑誌 (Chinese Journal of Clinical

<sup>3)</sup> 大学進学率は当該年度の大学募集人数は高校卒業生に対する進学者の率である。

Psychology)』における児童生徒のメンタルヘルスに関する近年の研究の動向、特に、「学校ストレス」、「学校適応感」、「精神疾患」の3つのトピックを中心に概観する。

中国国内外ともに近年の児童生徒のメンタルヘルスに関する研究は少ないが、既述のような理由から近年の中国の児童生徒のメンタルヘルスに関する研究を検討する必要がある。中国での教育臨床学、心理臨床学に関する主要な学術雑誌、上記4誌の過去35年間に掲載された論文のうち、児童生徒のメンタルヘルスに関するトピックスとして「学校適応感」、「ストレス（中国語：圧力）」、「メンタルヘルス（中国語：心理健康）」、「抑うつ」をキーワードとして文献を検索し、各学術雑誌における該当論文数を算出した（Figure 1）。論文総数は347件であった。児童生徒のメンタルヘルスに関する論文は1990年代から徐々に出現し、21世紀に入ってから、論文数は急速に増加した。特に中国臨床心理学雑誌の掲載論文が2000年に入ってから急増している。しかし、その中で児童生徒のメンタルヘルスに関する研究は学業成績や病気の治療などに関する論文が多い。

中国は経済の急成長に伴い、めまぐるしい社会変化の時を過ごしており、学校教育も同様である。そこで、最新の研究動向を把握するため、抽出された論文の中から過去3年間の研究論文

を詳細な分析対象とすることとした。その結果、最近3年間に掲載された文献から、「学校ストレス」、「学校適応感」、「精神疾患」の関連論文として11件が選択された。この11件の論文をまとめ、報告する。

### 学校ストレス

叶・楊・胡（2013）は、3つの都市部中学校と農村部中学校の1361名中学生を対象として、報恩意識が青少年の学業成績に与える影響について検討している。「報恩（Gratitude）尺度」、「日常性学習レジリエンス（Everyday Academic Resilience）尺度」、「ストレスの多いライフイベント（Stressful Life Events）尺度」、「学業成績（Academic Achievement）尺度」という4つの尺度を用いている。調査の結果、「報恩意識」は「学業成績」に正の影響を与え、「日常性学習レジリエンス」を媒介して、「学業成績」に影響を与えていることが示された。「ストレスの多いライフイベント」は「日常性学習レジリエンス」の媒介効果に調節効果を持ち、具体的に、「ストレスの多いライフイベント」の増加に伴い、「日常性学習レジリエンス」が「学業成績」に与えた影響は、小さくなっていくことが示された。こうした結果を踏まえ、報恩意識の重要性が指摘されている。

羅・趙・王（2014）は中学生613名を対象と

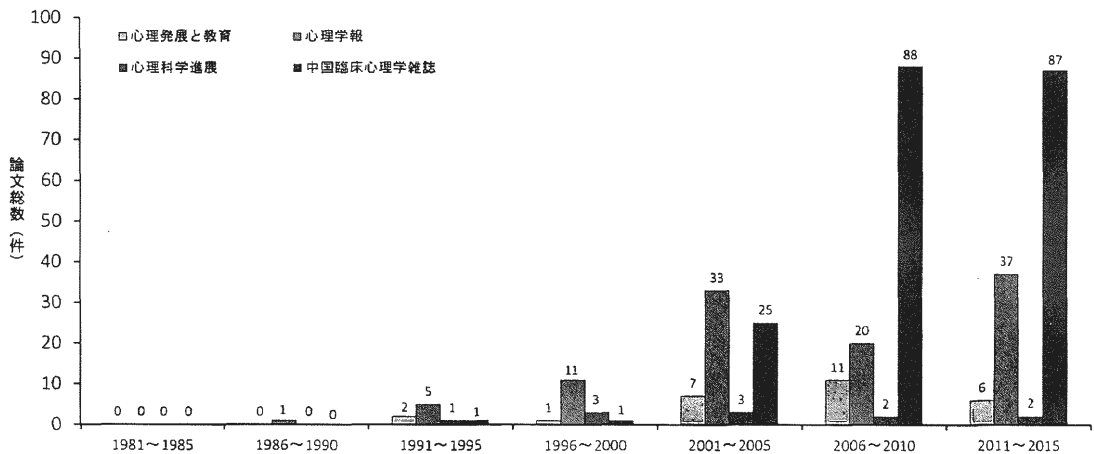


Figure 1. 中国におけるメンタルヘルスに関する4つの主要な学術雑誌に掲載された論文数の推移

して、中学生の感知における教師の自律的支援 (Perceived Teacher's Autonomy Support) が怠学に与える影響について検討している。「中学生の感知における教師の自律的支援 (Perceived Teacher's Autonomy Support) 尺度」, 「基本的欲求満足 (Basic Need Satisfaction) 尺度」, 「学業自己調整 (Self-Regulation) 尺度」, 「怠学尺度」という4つの尺度を用いている。調査の結果, 「中学生の感知における教師の自律的支援」は「基本的欲求満足 (Basic Need Satisfaction)」, 「自律動機 (Autonomous Motivation)」と正の相関があり, 「基本的欲求満足 (Basic Need Satisfaction)」, 「自律動機 (Autonomous Motivation)」は「怠学」と負の相関があることが明らかになった。また, 「中学生の感知における教師の自律的支援」は「基本的欲求満足 (Basic Need Satisfaction)」, 「自律動機」を媒介して「怠学」に影響を与えていることが示された。これらの結果を踏まえ, 学校現場では, 教師の支援の重要性が示された。

以上より, 近年の中国の教育現場での児童生徒のストレスに関する研究は, 主に学業や成績に与える影響という観点から論じられていると言える。学業成績のみならず, 他のメンタルヘルスの関連要因との検討が必要である。

#### 学校適応感

張・梁・鄧・陸 (2014) は南京市3つの中学校の中学生709名を対象として, 3年間の追跡調査を行い, 学校雰囲気と学校適応の関連について検討した。尺度は「学校雰囲気尺度」, 「教師-児童評価 (The Teacher-Child Rating Scale) 尺度」と「学業成績 (中間と期末テストの平均値)」を用いた。「学校雰囲気尺度」は, 「教師のサポート」, 「クラスメイトのサポート」と「学生の自律的機会 (Opportunities for Student Autonomy)」という3つの下位尺度で構成されていた。調査の結果, 第1に, 1年生の時感じられた学校雰囲気は2年生, 3年生の学校適応と正の相関があった。第2に, 2年生の時感じられた学校雰囲気は3年生の学業成績と正の相関があることが明らかになった。第3に, 教師のサポート, クラスメイトのサポートは学校適

応に影響を与えることが明らかになった。しかし, 1年生の時, クラスメイトのサポートは学校適応と学業成績に正の影響を与えるが, 2年生の時の, クラスメイトのサポートは学校適応と学業成績に負の影響を与えることが示された。第4に, 中学生が感じられた学生の自律的機会は学校適応と負の相関があると明らかになった。この結果から, 早期のクラスメイトと教師のサポートは中学生の学校適応に正の影響を与えるが, 高学年になると, 早期のクラスメイトのサポートは学校適応に負の影響を与えることが示された。今後はこの理由について検討する必要がある。

劉・周・李・陳 (2015) は上海市2つの小学校の3, 4年生と2つの中学校の7, 8年生1026名を対象として, 児童期中期と思春期早期の孤独志向傾向 (Preference for Solitude) と心理適応との関連について検討した。尺度は「独り志向傾向尺度 (Preference for Solitude Scale)」, 「児童用孤独感尺度」, 「児童用抑うつ尺度」, 「児童用自己自覚尺度」尺度と「仲間指名 (最も好きと最も嫌いなクラスメイトを3名指名する)」を用いている。調査の結果, 児童生徒の孤独志向傾向は孤独感, 抑うつと顕著な正の相関, 自尊感情と負の相関があることが明らかになった。

また, 孫・梁・陳・陳 (2014) は北京市の2歳の幼児200名, 及び5年後の7歳児125名を追跡し, 追跡調査を通して, 児童の早期の気質の特徴が社会適応に与える影響を検討した。2歳児童を観察し, 5秒を単位として, 児童の気質上の活躍性を評価した。また, おもちゃを片付けることなどの状況の下, 児童のセルフコントロール持続時間を記録した。これらの観察を通して, 児童の気質上の活動性とセルフコントロールを測定した。さらに, 「親の養育方式尺度」, 「学校適応感尺度」という2つの尺度を用いた。調査の結果, 親の低制限と高支配は児童の気質上の活動性に負の影響を与えている。児童のセルフコントロールは学校適応に正の影響を与え, 親の養育方式はこの関係の中で調節効果にならないことが示された。

侯・刘・屈・张・蒋 (2015) は17つの農村部の学校4～9学年103学級4021名の生徒を対象として、学級構成が留守児童（両親とも出稼ぎに行っている農民が郷里に残した子ども）に与える影響について検討している。つまり、普通家庭の農村児童（両親がそばにいる子ども）の学級の中で占める比率が留守児童のメンタルヘルスに与える影響について検討している。調査の結果、普通家庭の農村児童が占める比率は留守児童の自尊心に負の影響を与えている。また、うつ症状に関して学級構成は同化効果を持ち、学級の中で子どものうつ症状は他の生徒から影響されていることが明らかになった。

譚・彭・钟 (2013) は小学生5年-中学校3年生の2372名児童生徒を対象として、学校不適応が学業に与える影響について検討した。尺度は「学校不適応尺度」、「学業自己効力感尺度」という2つの尺度と学業成績を用いている。調査の結果、学校不適応は学業自己効力感と学業成績と負の相関があり、学業自己効力感と学業成績と正の相関があることが明らかになった。また、学校不適応は学業成績に負の影響を与え、学業自己効力感と学校不適応と学業成績の間で媒介効果を果たしていることが明らかになった。

### 精神疾患

李・许・鲍・陈・苏・张 (2015) は703名中学生を対象として、家庭の経済的ストレスと青少年のうつの関連について検討した。尺度は「家庭の経済的ストレス尺度」、「差別感覚 (perceived discrimination) 尺度」、「愛着尺度」、「児童用うつ尺度」という4つの尺度を用いている。調査の結果は、「家庭の経済的ストレス」は子どものうつと正の相関があることが示され、また、「家庭の経済的ストレス」は「差別感覚 (perceived discrimination)」が媒介して子どものうつと関連していることが明らかになった。愛着が高い青少年に比較して、「差別感覚 (perceived discrimination)」は愛着が低い青少年のみに媒介効果があることが示された。このような結果を踏まえ、差別のない環境を作りあ

げること及び親の子どもとのコミュニケーションや信頼関係は非常に重要と考えられる。

赖・张・鲍・王・熊 (2014) は広東省の688名中学生を対象として、親の心理的統制と青少年の抑うつとの関連を検討した。尺度は「親の心理的統制尺度」、「孤独感尺度」、「意志統制尺度」、「抑うつ尺度」という4つの尺度を用いている。調査の結果、親の心理的統制は子どもの抑うつに正の影響を与え、その中で、孤独感が抑うつを媒介していた。さらに、孤独感の媒介効果は意志統制の調整効果を受けていることも明らかになった。

许・周・刘・邓 (2014) は南京市の高校1年生460名（有効431名）を対象として学校雰囲気は青少年の抑うつに与える影響について検討した。尺度は「学校雰囲気尺度」、「セルフコントロール尺度」、「抑うつの自己評価尺度」という3つの尺度を用いている。調査の結果、学校雰囲気は直接に抑うつに影響し、セルフコントロールを媒介して抑うつに影響を与えていることが明らかになった。

また、丁・王 (2014) は中学生476名（有効454名）を対象として青少年期のアタッチメントと抑うつの関連を検討している。尺度は「アタッチメント尺度」、「友達関係尺度」、「青少年抑うつ尺度」という3つの尺度を用いている。その結果、アタッチメントと友達関係に正の相関があり、アタッチメントと友達関係は抑うつと負の相関があることが明らかになった。また、友達関係はアタッチメントと抑うつとの関係の中で、媒介効果を果たしていることが明らかになった。

周・奚・程・季・李 (2013) は小中高生と大学生全部で4006名を対象に在籍の学生のメンタルヘルスの現状について調査をした。程 (2013) が作成した自己報告形式の「百項目心理症状尺度」を用いている。調査の結果、約21.3%の生徒が心理的困難を抱えており、また、学業ストレス、家庭環境（父子、母子家庭、離婚など）と経済状況は学生のメンタルヘルスに影響を与えていることが明らかになった。

さらに、王・范・奎・陈 (2014) は500名の

高校生を対象として親間の衝突が青少年の抑うつと社会不安に与える影響について検討した。尺度は「親間の衝突知覚尺度」、「親間関係安全感尺度」、「抑うつ体験尺度」、「社会不安尺度」という4つの尺度を用い、調査の結果、子どもが感じられた親間の衝突は情緒不安感、社会不安と抑うつに影響を与えることが明らかになった。

以上が主な研究とその成果である。過去3年間ではあるがこれらの研究を通して中国における児童生徒のメンタルヘルス、学業と学校生活や親子関係との関連が検討されていることが示された。

#### 児童生徒のメンタルヘルスに関する研究の課題

これまで概観したように、中国においては児童生徒のメンタルヘルスに関する研究論文はまだ少ないのが現状である。一方、ポジティブ心理学領域においては、学業に関する「レジリエンス」、「情緒調節」の論文が多いことが明らかになった。また、子どもの抑うつに関しては親子関係に関連して検討されている。しかし、学校での生活や友達関係などの視点から論じられる論文はほとんどない。実際に中国の児童生徒のメンタルヘルスに関する援助ニーズを考慮すると、学校ストレスや友達関係などの視点から子どもの抑うつについて論じる必要はないであろうか。既述のように、実際、現在の中国の児童生徒は登校に対する意識がネガティブの方が非常に高い。したがって、青少年犯罪などの問題から見ても、親子関係の点からだけでなく、中国の児童生徒のメンタルヘルスに対する援助について様々な点から検討する必要がある。

本稿では、中国の児童生徒のメンタルヘルスを論じる中、登校回避感情を抱く生徒が決して少なくないことを述べた。森田(1991)は欠席願望を持ちつつ登校する児童生徒を「グレイゾーン」と名づけ、「グレイゾーン」の生徒は比較的容易に不登校に陥る可能性がある」と指摘した。中国の現在では、大きなストレスを感じながら登校している児童生徒が多い。彼らの内面

的な側面、特に登校意識、友達関係、学校ストレスや疲労感などを検討することによって、中国の生徒の学校不適応の予防に貢献できるであろうと予測する。学校不適応を未然に防ぐためにも、中国の児童生徒の登校意識を検討する必要がある。

#### 引用文献

- ベネッセ教育開発センター(2008). 学習基本調査・国際6都市調査報告書 平日の学習時間・宿題をする時間・テレビ視聴時間 ベネッセ教育開発センター Retrieved from [http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon\\_6toshi/soku/soku\\_05.html](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon_6toshi/soku/soku_05.html) (2015年12月12日)
- ベネッセ教育開発センター(2008). 学習基本調査・国際6都市調査報告書 親とのかかわり ベネッセ教育開発センター Retrieved from [http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon\\_6toshi/soku/soku\\_15.html](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon_6toshi/soku/soku_15.html) (2015年12月12日)
- ベネッセ教育開発センター(2008). 学習基本調査・国際6都市調査報告書 心や身体の疲れ ベネッセ教育開発センター Retrieved from [http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon\\_6toshi/hon/hon\\_1318.html](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon_6toshi/hon/hon_1318.html) (2015年12月12日)
- 別 郭榮(2005). 高等教育の大衆化 黄福涛(編)(pp.25-27) 1990年代以降の中国高等教育の改革と課題 高等教育研究開発センター
- 陳 晶晶・長崎 勤・庄司 一子・茂呂 雄二(2013). 日中子どもの未来展望：子どもの未来への楽しみと心配に関する日中比較 筑波大学心理学研究, 46, 17-29.
- 代 維祝・張 衛・李 董平・喻 承甫・文 超(2010). 压力性生活事件与青少年问题行为：感恩与意向性自我调节的作用 (Dai, W.& Zhang, W.& Li, D.& Yu, C.& W,

- C.(2010). Relationship Between Stressful Life Events and Problem Behaviors in Adolescents: Effects of Gratitude and Intentional Self-regulation.) 中国临床心理学杂志, 18, 796-801.
- 丁俊扬·王美萍 (2014). 青少年亲子依恋与抑郁: 友谊质量的中介作用 (Ding, J. & Wang, M (2014). Parent-adolescent Attachment and Depression: The Mediating Effect of Friendship Quality.) 中国临床心理学杂志, 23, 289-231.
- 本間 友巳 (2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 侯珂·刘艳·屈智勇·张云运·蒋索 (2015). 班级结构对留守儿童心理健康的影响: 同化还是对比效应? (Hou, K. & Liu, Y. & Qu, Z. & Zhang, Y. & Jiang, S.(2015). The Impact of Classroom Composition on Psychological Adjustment of Left-behind Children: Contrast Effect or Assimilation Effect?) 心理发展与教育, 31, 220-229.
- 古市 裕一 (1991). 小中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 木山 徹哉 (2005). 現代中国における義務教育の展開——ウェステージと「教育熱」—— 阿部 洋 (編)「改革・開放」下中国教育の動態 ——江蘇省の場合を中心に—— (pp.71-103) 東信堂
- 国立青少年教育振興機構 (2015). 高校生の生活と意識に関する調査報告書——日本・米国・中国・韓国の比較—— 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター Retrieved from [http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/98/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/) (2015年12月12日)
- 赖雪芬·张卫·鲍振宙·王艳辉·熊庆龙 (2014). 父母心理控制与青少年抑郁的关系 (Lai, X. & Zhang, W. & Bao, Z. & Wang, Y. & Xiong, Q. (2014). Parental Psychological Control and Depression Among Adolescents: A Moderated Mediating Model.) 心理发展与教育, 30, 293-302.
- 李董平·许路·鲍振宙·陈武·苏小慧·张微 (2015). 家庭经济压力与青少年抑郁: 歧视知觉和亲子依恋的作用 (Li, D. & Xu, L. & Bao, Z. & Chen, W. & Su, X. & Zhang, W. (2015). Family Financial Strain and Adolescents' Depression: The Effects of Perceived Discrimination and Parent-adolescent Attachment.) 心理发展与教育, 31, 342-349.
- Li, J. (2002). A cultural model of learning : Chinese "Heart and mind for waiting to learn". *Journal of Cross-cultural Psychology*, 33, 248-269.
- 刘俊升·周颖·李丹·陈欣银 (2015). 儿童中期和青春期早起独处偏好与心理适应之关系 (Liu, J. & Zhou, Y. & Li, D. & Chen, X. (2015). Relations between Preference for Solitude and Psychological Adjustment in Middle Childhood and Early Adolescence: A Moderated Mediating Model.) 心理学报, 47, 1004-1012.
- 罗云·赵鸣·王振宏 (2014). 初中生感知教师自助支持对学业倦怠的影响: 基本心理学与需要, 自主动机的中介作用 (Luo, Y. & Zhao, M. & Wang, Z. (2013). Effect of Perceived Teacher's Autonomy Support on JuniorMiddle School Students' Academic Burnout: The Mediating Role of Basic Psychological Needs and Autonomous Motivation.) 心理发展与教育, 30, 312-321.
- 文部科学省 (2014). 平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/1351936.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1351936.html) (2015年12月12日)
- 森田洋司 (1991). 「不登校」現象の社会学 学文社
- 康树华 (2000). 青少年犯罪, 未成年人犯罪概念的界定与涵义 公安学刊, 12(2), 15-19.



- 孙 铃・梁宗保・陈会昌・陈欣银 (2014). 儿童两岁活跃性, 自我控制与5年后学校适应-父母养育方式的调节作用 (Sun, L. & Liang, Z. & Chen, H. & Chen, X. (2014). Exuberance and Self-Control as Predictors of Social Adjustment 5 Years Later: The Moderating Role of Parenting.) 心理发展与教育, 30, 9-15.
- 谭千保・彭阳・钟毅平 (2013). 学校适应不良图式对学业成就的影响: 学业自我效能感的中介作用 (Tan, Q. & Peng, Y. & Zhong, Y. (2013). School Maladaptive Schema and Academic Achievement: Mediation of Academic Self-efficacy.) 中国临床心理学杂志, 21, 820-822.
- 中華人民共和国刑法 (2015). 中華人民共和国公安部 Retrieved from <http://www.mps.gov.cn/n16/n1282/n3493/n3763/n493954/494322.html> (2015年12月12日)
- 中国法律年鉴 (2002-2011). 中国法律年鉴 2002-2011 中国法律年鉴出版社
- 中国教育統計年鉴 (2013). 中国教育統計年鉴 人民教育出版社
- 中国統計年鉴 (2014). 中華人民共和国国家統計局 Retrieved from <http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/2014/indexch.html> (2015年12月12日)
- 王明忠・范翠英・周宗奎・陈武 (2014). 父母冲突影响青少年抑郁和社交焦虑: 基于认知-情境理论和情绪安全感理论 (Parental Conflict Affects Adolescents' Depression and Social Anxiety: Based on Cognitive-contextual and Emotional Security Theories.) 心理学报, 46, 90-100.
- 王巖崧・庄司一子 (2015). 中学生の登校回避感情に関する検討 ——中国公立中学校を対象として—— 日本教育心理学会総会発表論文集, 57, 718.
- 许有云・周宵・刘亚鹏・邓慧华 (2014). 学校氛围对青少年抑郁的影响: 自我控制的调节作用 (Xu, Y. & Zhou, X. & Liu, Y. & Deng, H. (2014). Self-control Mediates the Relationship between School Climate and Adolescents' Depression.) 中国临床心理学杂志, 22, 860-863.
- 叶宝娟・杨强・胡竹菁 (2013). 感恩对青少年学业成就的影响: 有调节的中介效应 (Ye, B. & Yang, Q. & Hu, Z. (2013). Effect of Gratitude on Adolescents' Academic Achievement: Moderated Mediating Effect.) 心理发展与教育, 29, 192-199.
- 翟宇華 (2006). 中国都市部中学生の学校忌避感を抑制する要因に関する研究 教育心理学研究, 54, 233-242.
- 张光珍・梁宗保・邓慧华・陆祖宏 (2014). 学校氛围与青少年学校适应: 一项追踪研究 (Zhang, G. & Liang, Z. & Deng, H. & Lu, Z. (2014). Relations between Perceptions of School Climate and School Adjustment of Adolescents: A Longitudinal Study.) 心理发展与教育, 30, 371-379.
- 张文新 (2002). 中小學生欺负/受欺负的普遍性与基本特点 (Zhang, W. (2002) Prevalence and Major characteristics of Bullying/Victimization among Primary and Junior Middle School children.) 心理学报, 34, 57-64.
- 周晓琴・奚晓岚・程灶火・季庆・李萍 (2013). 在校学生心理健康状况调查 (Zhou, X. & Xi, X. & Cheng, Z. & Ji, Q. & Li, P. (2013). An Investigation on Mental Health Status of Students in School.) 中国临床心理学杂志, 21, 1026-1028.